

## 1. 主催者・共催者名

環境省 地球環境局 国際連携課 国際地球温暖化対策室

## 2. タイトル

2020年以降の気候変動枠組みにおける各国コミットメントの評価・レビュー体制の確立に向けて

## 3. 目的・概要

2020年以降の気候変動枠組み構築に向けた交渉が開始されるにあたり、その基礎作りの一環として、日本が現時点で提案する評価・レビュー体制を紹介したうえで、イベント参加者との議論・意見交換をする。さらに、同提案の実現に向け、国連気候変動枠組条約のもとでの現在の取組について議論を深めつつ、他の国際協定からの教訓を参考にする。

## 4. アジェンダ

- 開会の挨拶 環境省地球環境審議官 白石順一氏
- 目的説明 環境省地球環境問題交渉官 水谷好洋氏
- 発表
  - 「MRVの現状と課題」  
公益財団法人地球環境戦略研究機関 上席研究員 田辺清人氏
  - 「自主コミットメント設定プロセスへの科学的知見の応用促進」  
公益財団法人地球環境戦略研究機関  
気候変動とエネルギー領域 エリアリーダー・上席研究員 田村堅太郎博士  
\*欠席された環境省、島田久仁彦参与に代わって、田村博士の発表がなされた。
  - 「他の多国間協定における評価・レビュー体制」  
名古屋大学 高村ゆかり教授
- 参加者による議論、質疑応答

## 5. 発表・議事の概要

- 同サイドイベントにはさまざまな国からの会議参加者が集まった。白石地球環境審議官は、開会の挨拶に続き、イベントの目的を簡単に説明しつつ、2020年以降の枠組みが機能するためには、透明性が鍵を握っており、各国のコミットメントの適切な評価・レビューが不可欠であることを強調した。
- 続いて、司会の水谷氏は、本イベントの3つの目的について具体的に説明しつつ、日本が提案する、各国のコミットメントについての国際的な事前協議のプロセスおよび取組状況を評価・レビューするプロセスを紹介した。また、今後議論を深めるべき内容として、既存の仕組みをどのように利用できるか、強制的な義務を課す以外にコミットメント遵守を促進する方法はないか、他の国際協定から学べることはないか等が挙げられた。
- 3人の発表者は、それぞれの専門の立場から、2020年以降の枠組みの中で評価・レビュープロセスを有効に機能させるための知見を紹介した。
- 参加者による議論、質疑応答の場においては、以下の点について、活発な議論が交わされた。
  - 既存のMRVプロセスを応用して新しい評価・レビュープロセスを実現することに関しては、交渉の難航および隔年更新報告書（BUR）の提出に必要とされる途上国への支援不足が障害となること。
  - コミットメント提出のための共通テンプレートの作成に向けた議論において、参加する国をG20などに限定することは政治的に困難であること。
  - 一つの指標で締約国すべてを満足させること、評価・レビュープロセスを率先するコンソーシアムを組織することが困難であること。
  - 日本を含め、コミットメント案を事務局に提出する以前に、国内の政治的利害が障害となること。
  - コミットメントの中身が明確に定められない中、2015年合意も2度目標も達成できないのではないかと懸念。
- これらの指摘に対し、発表者からは次のような回答があった。
  - 日本は途上国への支援の枠組みを提案し、MRVプロセスの機能に向けて努力していく必要

がある。

- ベンチマークに幅を持たせ、そこに多様な指標を採用できるようにすることが考えられる。コンソーシアムへの参加機関を国や地域のバランスを取りながら拡大していくことにより、信頼性のあるベンチマークが設定できるのではないかとと思われる。
- 日本を含め、締約国は目標の低いコミットメントに甘んじてしまってはならないと思う。だからこそ、ピア・レビュー（相互審査）の仕組みが次の枠組みでは必要となってくる。
- 確かに、コミットメントは明確でなければならないが、もう2年しか残されていない中、大胆な合意に至る可能性はかなり低くなってきている。したがって、目標値やその達成に向けた取組方法などに対するレビューシステムなどを含め、締約国の多様性に対応するための工夫・仕組みに合意がなされ、それを進化させていくやり方に期待したい。

## 6. 会場写真

